
Celestial Memories — — **想いの交差する空で** — —

a16tenpu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Celestial Memories — 想いの交差する空
で —

【Nコード】

N7659W

【作者名】

a16tenpu

【あらすじ】

大乱を挟んで勢力図の塗り替えられた極東アジア。その空は謀略と憎しみに満ちていた。だが、空に漂うのは暗い世界だけではない。純粹な希望が、想いが、真摯な願いと共に託されていた。その大空をかつて仲間と交わした約束を果たす為だけに飛び続けている青年は、戦争という大きなうねりの中で新しい風に出会う。彼は全てを傷つける歪んだ空の果てに何を見つけるのか。それはまだ誰にも分からない。

諸注意（はじめにお読み下さい）（前書き）

念のため書いておいた注意書きです。長いので読み飛ばして結構ですが、最低限以下の箇条書き項目だけはお読み下さい。

- 1 ・駄文かつ遅筆につき更新が不定期です
- 2 ・頻繁に訂正が起ります。またストーリー展開の変更も起ります
- 3 ・更新履歴を定期的にチェックして下さい
- 4 ・この作品は特定の団体を賛美、支持するものではありません
- 5 ・感想、批評はお待ちしていますが、荒らし行為はお断ります

諸注意（はじめにお読み下さい）

以下は詳細の説明です。無駄に長いので読み飛ばしても結構です。

1 .

筆者は初投稿につき、現状では執筆スピードが遅く、文章能力も不安定であり、スランプや既に投稿した部分の修正で更新が遅くなる場合があります。それ故、更新は完全に不定期です。

2 .

1 .と同じ理由により、最新話と既に投稿した部分で、設定及び展開、人物の性格、行動原理などに矛盾が生じる可能性があります。確認した時点で加筆修正を行うので、随時改訂が行われます。

もし読んでいて矛盾を発見した場合は、感想欄もしくは作者へのメッセージでその問題を指摘して下さい。こちらで確認後、同じように随時説明及び修正を行います。

そのため加筆訂正が大幅に存在し、前後の繋がりが一時的に断絶する事があります。また、製作途中で大幅に展開が訂正される事も起こり得ます。ご了承下さい。

3 .

最新話の投稿日時及び、作品の根幹となる部分の変更を行った改訂の記録を第二部分の更新履歴に掲示致します。執筆過程で確認できた問題事項、及び実行した修正などは即座に更新履歴に報告し、掲示する事と致します。各自で定期的に確認して下さい。

また、既に投稿した部分の大幅な改訂、重大な変更事項については、その時点の最新話の前書きにも併記する予定です。

4 .

この作品はフィクションです。本文中及び設定に実際の組織、国家、企業などの団体や、兵器、商品など実在する存在が登場します

が、これらの全ては現実とは全く関係なく、また、この作品が特定の団体を支持するものでないことを明記しておきます。

また、作者の政治思想が反映される場合がありますが、一切の政治思想の賛美は行っておりません。

5 .

読後の感想、問題点の指摘、起こるべき展開の予想など作品に関わる記述は感想として自由に投稿して下さい。ただし、政治思想などの個人的判断、または理由なく行う批判（特に作品を削除すべきだというもの）は書き込みをお断りします。原則的には感想に返答しないだけで削除などはいりませんが、あまりに連続した投稿、他の読者が気分を害する物、個人への誹謗中傷のみのものについては予告なく削除する場合があります。ご了承ください。

以上の注意事項は適宜変更及び追加が行われることがあります。基本的事項だけだとは思いますが、問題点がある場合は感想欄にてご指摘下さい。次話は更新履歴欄となり、その次から本編となります。

（追記）

更新履歴の量が少ないため、独立したページを作成できなかったので、暫定的に下部に更新履歴を掲載します。

2011年9月16日

注意書き投稿

2011年9月17日

更新履歴部分を注意書きに追加。及び、Episode1・1投稿

2011年10月3日

Episode1・1改稿

2011年10月25日

Episode1・2投稿

2011年11月8日

一部
改稿

諸注意（はじめにお読み下さい）（後書き）

この小説が少しでも読者を楽しませられるものであることを祈っています。

Episode 1: 1. E a g e o f W a r f a r e (1) (前 書 き)

注意書きの一日遅れで投稿という暴挙をやらかした第一話です。これの前にプロローグを追加する予定ですのでご了承下さい。

Episode 1.1 Eagle of Warfare (1)

それは梅雨時にはよく晴れた、雲一つ無い快晴の日に届いた。差出人不明のシンプルな便箋。こちらの住所と氏名を書いた欄はダイレクトメールみたいに印刷されたシールが張ってある。

当然心当たりはないし、最近は友人とは電子メールで連絡をとっている。最近は多くなった内向きな人間の一人である俺には、こんな風流なやり方で連絡を取ろうとする人間は居ないはずだ。

だからこれは開ける前に捨てても構わないものだつた。それでも俺がそれを開こうと思ったのはその表面にエアメールの標記が押されていたからだろう。

しかし、その便箋に入れられていたのはたった二枚の紙片だけだつた。一枚目は流暢な筆記体で書かれた一文の載っていたメモ用紙。手紙にして送るような仰々しいものではない。しかし、その文面を読んだ瞬間に俺は送り主とこれの目的を理解した。

— What are you fighting for? —

——貴方は何のために戦う？

そこに記されていたのは俺の人生の半分を形作っている言葉。これを送ってきたのは、最も激しい時代を共に駆けた最高の僚機にして決して赦すことの出来ない宿敵。書かれていたのは……かつて俺が投げかけた疑問。これは彼が送ってきた答えなのだろう。

疑問文をそのまま投げ返す。つまり彼はこの質問に答えるつもりはないと言つこと。

「……言葉は不要……か。つくづく彼らしいな」

もつと判りやすい内容にすることなど幾らでも出来ただろうに。本来なら文句の一言一言でも送り返すべきなのだろうが、肝心の文

句が浮かんでこない。寡黙な彼にあまりに相応しい内容に思えたからだろう。

もう一枚は離陸寸前の戦闘機——最強と名高いF-22A——の写真だった。彼はどうやら無事に古巣に帰っていたらしい。

「……そろそろ、悩んでる時間は終わりか」

そして、彼がどうしてこの言葉を返してきたのかもよく判っている。俺が彼とこうした平和な言葉を交わすことは二度とないからだ。彼に次に会うときは、最初に出会った場所と同じになる。そして、どちらかがそこでもう片方にピリオドを打つことになるだろう。

「俺も、覚悟を決めないとな」

あの空を共に飛んだ射手達の最後の生き残りとして、彼には負けるわけにはいかないのだから。

「負けるわけにはいかないんだ、……——中佐」

風が吹き抜けて、メモ用紙が吹き飛ぶ。今日も翔ぶには丁度良い日だろう。一気に視界から消えていくメモ用紙を眺めながら、手元に残った写真をポケットに仕舞った。

Celestial Memories Episode 1.1 Eagle of Warfare (1)

視界全体に広がる雲。殆どの航空機にとって天敵である”視界が無い”という状況は、この機体——西側陣営で最速の大鷲——にとっても脅威に他ならない。此处数年の整備水準の低下を考慮すれば計器類も完全に信頼する事は出来ないだろう。本来ならば避けるべきそのコースをとっていたのは、ルートをのんびり選んでいる時間的余裕が無い程切羽詰まった状況だからだ。理由もなく積乱雲の中など飛んでられないが、地上からの指示によって指定されている以上は回避のしようもない。自らの腕とこの機体を整備した整備班の

技能を信じるだけだ。慎重に進路を確認しつつ飛行を続ける。

『焦るなよ、イーグルのポテンシャルがあれば十分抜けられる』

不意に上官の声が聞こえる。前方を飛んでいる筈の彼は、殆ど変化のない俺の機体の挙動を見抜いてたらしい。俺が前方に目を凝らしても彼の機体は殆ど見えない——レーダーを確認すれば5kmは軽く離れている——から、彼は俺の挙動を非力な後方警戒レーダーのフリップで見抜いたと言うことになる。

「了解」

安心させるためを含めてスロットルを少し開く。人の様子に気付くのが苦手な俺も、どう言った挙動が周囲にどう見えるか位は分かる。この場合は平然と飛んでいれば持ち直したと見えるだろう。

出力を上げたエンジンの振動を伝えつつもF-15Jは先程より安定して加速し、最後の積乱雲を突き抜けた。

——眩しい陽光が網膜を焦がした。HUDの表示が白い光の中に
〈ヘッド・アップ・ディスプレイ〉
拡散する。

『流石に雲の上だ。地上と比べれば何処も明るいな』

無線機から再び声が聞こえた。前方に鮮やかな迷彩に染め上げられた鷲が現れる。俺の上官——理想的なベテラン戦闘機乗りだった——が乗る機体だ。その垂直尾翼にはエースの証である蛇のエンブレムが描かれている。当然ながら同じ部隊である以上、俺の機体にも全く同じエンブレムが書かれているのだが。

「ですね。今日は飛ぶのにも丁度良いでしょう」

相槌を返してみたが長機のパイロットからは何の返答もなかった。その言葉を聞いた彼が何を考えるのか、それは俺には判らない。少
しだけ沈黙が続く。それを破ったのは第三者の声だった。

『AWACS here, call sign "Midnight"』

ht eye". Cobra11 and Cobra12, do you read? (空中管制機ミッドナイトアイよりコブラ11、12、聞こえるか)』

ヘルメット内蔵のヘッドセットから低い英語が漏れる。日本人特有のイントネーション。上空に飛んでいる臨時便のAWACS(空中管制機)からの通信だった。

『This is Cobra11, no problem. (こちらコブラ11、問題無し)』

『This is Cobra12, Loud and clear. (こちらコブラ12、感度良好)』

返答をしつつも意識は身体表面とMFDに向ける。機体の状態を探るためだ。本当に腕のよい戦闘機乗りは異常が無いかどうか感覚だけで判るらしい。俺はコンピュータの自己診断と合わせてようやくと言ったレベルでしかないが MFDに表示されたステータスに異常はない。機体自体の挙動にも今のところ違和感は無かった。F-15Jの心臓たるエンジンの鼓動が、機体表面を流れる空気の動きが、安定した振動として俺に伝わってくる。何時も通りだ、最上の状態で整備されている。心配するほどには整備の質も落ちていないようだ。

『この後は暫く日本語でいい。今回の作戦内容を確認する』

通信機の方こう——土佐湾を遊覧飛行中であるはずの空中管制機——から俺達に命令を下している管制官は、そう前置きすると今回の飛行内容の説明を始めた。

『国籍不明機が数機防空識別圏に侵入したことがつい先ほど確認された。確認した警戒レーダーの解析によれば相手は戦闘機くらい的小型機、速度はM1.2で飛行中の様だ。こちらのレーダーでは捕捉できていない。コブラ11、12は詳細を確認した後、防空識別圏外へ退去させる。領空への侵入を許すな』

『了解』

『了解』

本来レーダーサイトだけで筒抜けになるはずの敵機の行動の詳細が、AWACSが出張って来てすら分からないと言うのはあまりにも異常な事態だ。本来なら現行のどんな戦闘機でも地上の大出力レーダーには臆気だとしても映る。

『敵機は”ステルス”の可能性が高い、注意せよ』

だが、決して広くはない黄海の向こうには、僅か3年前に戦火を交えたばかりの”敵国”の領土が広がっている。そして、その敵国には殲20と呼ばれるステルス戦闘機が少なからず存在しているのも周知の事実だった。

『バックアップには第8航空団第304飛行隊のスクランブルでF-15Jが4機、第6飛行隊のスクランブルでF-2Aが2機来る予定だ』

しかも、その最悪に近い可能性がかなり高いらしい。そうでなければスクランブルが初動で6機になるわけが無い。まあ、そうでなければ態々フライトプランを無視してまで俺達にお呼びが掛かることなどはなかっただろうが。

『困難な任務でも君たちなら出来ると信じている。教導隊の技量を存分に発揮してくれ』

日本空軍最強の精鋭部隊にして、日本の誇りたる飛行教導隊には。

『了解』

『了解』

管制機からの通信が切れる。おそらくは情報収集に力点を置くために分析に戻ったのだろう。それをいいことに長機のパイロットは愚痴を零し始めた。

『本来なら土佐湾でDACTの予定だったんだぞ。全く……、築地の連中は何回ヴァイパーに尻餅付かせる気だ？』

築城基地では前日に整備中のF-2Aが主脚を畳んで地面に接触する事故を起こしていて、スクランブル以外の飛行が差し止められていた。だからこそ彼らの代わりに俺達が新鋭機の訓練に付き合うことになり、結果としてスクランブルの第一陣として不明機に対処

することになったわけだが……。

「仕方ないでしょう。いきなり飛行隊の数が倍になって、ベテランの大半が教導で一線から抜けたんですから」

「こうなる前に人材を育てておけばよかったのにな。おまえみたいな促成栽培組が」飛行教導隊（此処）”に來た時点で空軍そのものの練度が落ちてるのは判ってる」

傍から聞けば酷い台詞だが、俺は特に違和感を感じなかった。俺も全く同じ事を思っているからだ。そもそも俺はまだ26になったばかり。幾ら実戦経験があるとしても、ようやく一人前のベテランとして一線に立てる年齢になっただけの筈だ。それなのに、末席とは言え日本空軍が誇る最精鋭部隊に在籍している。幾ら高性能化した航空機が老練した玄人の存在を認めないと言っても、これほど早いうちに技量が完成したと認められるほうがおかしい。そうなった理由が無いわけではないのだが、あくまで此処に來る基準とは全く別のものであった。それと評価基準をこった煮して欲しくはない、余計な苦勞を背負うことになるから。

——”あの人”も同じだったのだろうか？

ふと、そんなことを考える。俺より2年ほど早く航空記章を手に入れ、誰よりも優れた技量を持っていた教導隊のかつてのエース。俺が本当に尊敬している数少ない飛行機乗りの一人だった。今年で28になる筈だ、”大陸戦争で戦死していなければ”。

「まったくです。それもこれもあの戦争が悪い」

いい人や優れた人程早く死んでいき、ろくでもない、ただ存在するだけの様な職業軍人だけが生き残る。世の中はなかなか皮肉な構造で支えられているらしい。……だがそれも仕方ないのだろう。所詮”世界”なんてそんなものだ。

「5年前には、まさか航空学校の募集人数が一気に3倍に増えるとは誰も思わなかったでしょうね」

古参の精鋭は兎も角、中堅として組織と練度を支えるべきベテランはあの戦争で過半がリタイアに追い込まれた。その皺寄せが一気に現実のものとなろうとしている。

『この前の戦争自体がそれこそ”太陽が西から昇る”様な大事だからな』

こんなことになるとは誰も思わなかった。まさか西の大国、大漢中人民共和国と、アメリカの属国に過ぎなかったはずの日本が正面きつての全面戦争を行うなどと言うことは。

「まさに青天の霹靂でしたからね」

誰かが言っていたらしい名言がある。

——世の中こんなはずじゃなかった事ばかりだ。

よく言った言葉だ。一体誰がこんなことになるかと予想していただろうか？あれだけ和を尊んだ日本が大陸の国家と戦争し、僅か数年で世界第三位の空軍大国にのし上がるなどと言う出来の悪い架空戦記のような事が起きると。

西日本を中心とした戦災は縮小気味の経済を更に減速させた。大規模な軍拡は元から致命傷を負っていた財政に最後の一撃を与えた。何を考えてあの国が戦争を仕掛けたかは知らないが、経済的に日本を疲弊させたかったのだとすれば、一応成功していると言えるだろう。今のこの国は間違っても経済大国とは言えない。軍需産業がフル稼働して延命しているが、この体制が崩れるのも時間の問題だった。だから彼らは負けたわけではなかった。

それでも、彼らは戦争を仕掛けるべきではなかったと断言できる。彼らの作戦遂行上の都合による軍民無差別な拠点への攻撃、特に呉

に対して行われ、松山に着弾した小型核弾頭の使用は、経済と平和憲法の足枷を彼らの手によって碎いてしまったのだから。そして彼らは太平洋に覇を唱える機会を永遠に失い、それまでに得た繁栄をも失った。

『Midnight eye to Cobra 11 and 12, I caught an aim with a radar. I send the data. (ミッドナイトアイよりコブラ11及び12へ、目標をこちらのレーダーに捕捉した。データを送る)』

『I accept the data. (データの受信を確認した)……4機か、多いな』

編隊長のため息混じりの言葉が聞こえる。彼我の相対距離は90ノーチカル・マイル(nm、約162km)、移動速度から考えて紛れもなく戦闘機だった。しかも、五島列島を横断するルートに入っている。正面から突っ込んで強引に変針させなければ九州のド真ん中を貫通する領空侵犯を許すことになるだろう。

「先ずは小手調べってところでしよう。慎重に牽制すればなんとかなりますよ」

F-15Jの能力ではステルス機どころか高機動型のフランカーと戦うのでもきついのに、相手方が倍の数ではお話にもならない。どうやら俺達はあて馬で、本命は後続部隊らしい。俺達を相手にして傷ついた敵部隊を包囲して捕獲と言ったところか。

『ステルスだからって逃げたらコブラの名が泣くぞ』

だが……、甘い判断だ。それなら、もっと練度の低い部隊にやらせるべきだった。

「聞いてみただけですよ。実際にやったら俺達の価値が疑われる」
少なくとも、通常戦闘に最も熟練したアグレッサーに演じさせる役割ではない。

『時間が無い、正面から突っ込むぞ。盛大に歓迎してやろう』
編隊長は俺と同じ判断を下して、誰もが避けたがる正面对正面で

迎え撃つことを決めた。

「了解」

どうせ誰かが引く貧乏籤だ。別に俺たちが引いたからって驚くことじゃない。

『“アライアンス”は既に無いが、張子の虎じゃないことを見せてやるぞ！』

それに、戦争によって研ぎ澄まされた大鷲の爪は、かつての戦争で散っていった同胞たちの想いを乗せて更に鋭利になっているのだ。簡単に負けるようなことは無いし、在つてはならない。

『They ignored warning. I admit a warning shot after the re-warning message.（彼らは警告を黙殺した。再警告後の威嚇射撃を許可する）』

俺達と相手の行動次第では、あの戦争以来初めてこの国が手にした牙が振るわれることになる。この狭い海を挟んだ向こうに存在する西の大国を相手に。

既に軍勢力以外の価値を失った”彼ら”と、血を流して普通の国になった”俺達”の間に妥協点はない。再び大量の血を流して力の差を確かめ、その力を以て封じること以外は。

『Cobra11, roger that.（コブラ11、了解）』
「Copy.（コブラ12、了解）」

今回の事態が収束した時、彼らと俺達はどのように変化しているのか。何を失い、何を得ているのか。あの頃と同じように、俺には何も見えなかった。

だが、俺達が戦うことで、後方にいる誰かが血を流すのを避けることが出来るのだけは解っている。だから、戦うにはそれで十分だった。国家の剣としての戦闘機乗りは、その為だけに存在しているのだから。

Episode 1 : 1 E a g e o f W a r f a r e (1) (後 書 き)

一応文章として程々書いておいたはずですが、未だに戦闘にも入っていないんですね。もし読んでいただいている方がいらつしやったら、申し訳ありませんが次話投稿まで暫くお待ちください。

E p i s o d e 1 ・ 2 E a g l e o f W a r f a r e (2) (前 書 き)

ようやくですが英語部分を追加いたしました。これが正式版となります。

Episode 1.2 Eagle of Warfare (2)

相互確証破壊 (Mutual Assured Destruction)。冷戦時代において一般的に普及していた”平等な破滅への恐怖による均衡”を保証した歴史上の概念。子供の頃に多く学んだ中に出てきた一つの単語に過ぎないそれを、何時からか私はよく思い出すようになっていた。私が戦争に関わる職業に就いたからかも知れないし、もしかするとほんの少し前に戦争があったことを忘れられないからかも知れない。

そして、私がそれを思い返すようになった直接の切っ掛けが、4年前の戦争で実の兄が戦死したことにあつたのは確かだった。

その概念自体は抑止力と名前を変えて、現代でも当たり前前の考え方として引き継がれている。そして物々しい名前とは裏腹に、それ自体は2000年以上も前に作られた古代刑法の”目には目を、歯には歯を”を言い換えたものに過ぎなかった。つまり、初撃は”受けるもの”であつて”仕掛けるもの”ではないというのが前提だった。

勿論、国民の盾になると言う軍隊自体の役割を無視するわけにはいかないから、初撃を防ぐためのシステムが構築されてこその代償、盾より矛の方が強いのは昔から決まっていた。

国民にも被害が出るのだから、盾である軍隊に所属する軍人のちよつとした被害は、国民を守る為の犠牲として許容されていた。私もそれ自体は仕方ないと思う。それでも、軍隊に所属する将兵も守られるべき国民である事に変わりはない筈なのに。家族がいて、友人がいて、故郷があつて……。

その矛盾に誰もが目を瞑っていて、死んでいった人々には殆ど関心さえ払われない。歴史ではない人々の死は、それを知った人々に彼らが生き、死んでいった理由を問いかけるから。

その問いに誰も向き合えず、只忘れることで誤魔化そうとする。

そのあり方が生きることとして正しいのだとは判ってる。でも……。

——忘れてしまったら誰が彼らがいたことを残してくれるのか？

「貴方だったら、何て答えますか？」

兄は当時の日本の理念と航空記章を何より誇っていた。そして、その理念に殉ずる形で撃墜されて亡くなったという。そして、その理念は平和ボケとして否定され、今となってはかけらも残されていない。

もし私まで彼のことを忘れてしまったら、兄の死は何の意味も残さなくなってしまうだろう。

「ねえ、兄さん」

何もない空に向かって手を伸ばす。もしもう一度”兄さん”に逢えたら、聞いてみたいことが一つだけある。

——貴方には其処で何が見えたんですか？

飛行機雲が二つ、青空を切り裂いた。……その軌跡の先には、求めている答えは見えなかった。

Celestial Memories Episode 1. 2
Eagle of Warfare (2)

This is Cobral1. I caught the

target on the radar. Vector 3-0-0. I start approaching. (コブラ11、目標をレーダーで捕捉した。方位300。これより接触する)

編隊長の言葉が切っ掛けとなつて、データリンクの表示が変更される。巡航、遠距離向けのレーダー解析画像から機体同士のリンクを重ねた戦域マップへ。相対距離80ノーチカルマイル(nm、144km)、北西の方角。接触まであと240秒。既に相手方の長距離ミサイルの射程内に入っている可能性がある。

『Midnight eye consent. Cobra, I admit to start-up Fire Control. I pray for your happiness, good luck. (ミッドナイトアイ了解。.... コブラ隊、火器管制の起動を許可する。.... 幸運を祈る)』

管制官の気遣わしげな言葉が心地よく響く。張り詰めた空気、ただ飛ぶ時とは明らかに異なる、空を包む非友好的な尖った雰囲気が一気に空の重みを増した。

『Cobra11, Fire Control System start. (コブラ11、火器管制システム起動)』
『Cobra12, Safety device cancel lat ion. (コブラ12、安全装置解除)』

機体の火器管制システム(FCS)を起動。搭載されている2発の短距離用赤外線誘導ミサイルと、960発の20mm機関砲弾が、いつでも放てる状態となる。

『This is Japan Air-Force. You are Overflying for our Airspace. Change the course and exit our Air-defense identification zone immediately. (こちら日本空軍。貴編隊は我が国への領空侵犯を行おうとしている。直ちに進路を変

更し、防空識別圏より退去せよ）』

管制官が不明編隊に国際共通周波数で通信を開く。語気が相当強いのは強行姿勢を意識しているのだろう。当然だった、あの戦争以来、戦闘機が飛んできたのは初めてで、少なくとも一度は警告を無視しているのだから。

相対距離60nm（108km）。比較的信頼性の高い新型レーダー——J/APG-2型AESA——は長機のレーダーと同じ方向に相手を捉えた。あれが目標か。

ヘッド・トゥ・ヘッドの針路で目標と接触する——俗に言うヘッドオン——では、サインを出して警告する等と言う余裕はない。警告射撃も直撃するのが関の山だろうから無駄だ。

だが、ヘッドオンでなければどうか？——非常に簡単に全てをすることが出来、牽制を繰り返せば友軍が来援するまで普通に踏み留まれる。

それを実現することに対する唯一の障害は所属不明機の針路を塞がなければならぬことだけ。何も2機がかりで行う必要はない。散開した1機が牽制し、もう1機が別行動を取って回り込めばいいのだ。

「Cobra 11, Could you warp for their behind?（コブラ11、不明編隊の後方へ回り込めますか？）」

それだけを編隊長に問いかけると一瞬で返答が返ってきた。なんだかんだ言って結構な時間を共に飛んでいる。過剰な言葉は不要だった。

「I'll try it. Let you this are a.（やってみよう。ここは任せた）」

そう告げると彼はアフターバーナーを点火させ、加速しつつ緩降下を開始する。

「Good Luck.（幸運を）」

あっという間にコブラ11は音速を越え、雲の下に潜って視界か

ら消えた。……これで、完全に一人きりか。

「Cobra 12, Opening the decoy (コブラ12、デコイ展開)」

相手が散開に気付かないように胴体下パイロンに装着していた曳航式デコイを展開する。金属製とは言え構造的には只の凧なのだが、これが意外と見分けにくい。

「Midnight eye, roger that. (ミッドナイトアイ、了解した。)……しかし大丈夫か？単機で相対なんかして」

管制官が日本語で問いかけてくる。緊迫した状態で話すべきことではないはずだが、指揮権が無くてもこの行動を咎めたいらしい。

「勿論。現状でも数が劣るのだから挟撃の可能性に賭けた。それだけだ」

基本的に二機一組のエレメント単位で行動を行う事が前提である

ツーマンセル

戦闘機では、一部の訓練以外で単独行動をする事など”本来は”発生しない。だから普通ではない行動を進言した俺と、それを実行した編隊長のことを不安視しているのだろ？。まあ、当然ではあるが……。

『だが、最悪4倍の敵に囲まれるぞ』

しかし、編隊長も何も考えずに飲み込んだわけではないのだ。

「心配するな。こんなときの飛行教導隊だ」

俺達だけはそうしたノウハウがある。単機で複数機を要撃する訓練もプログラムにはあり、回数は少なくとも実際に行われているのだ。それに……。

——こうした事態には慣れている、……からな

『何か言ったか？』

「いや」

おしゃべりは此処まで。最後に一つだけ頼んでおくか。

「Midnight eye, Request permitting all weapon. (ミッドナイトアイ、全兵装の使用権を申請する)」

俺が依頼した内容に虚を衝かれたのか、返答する言葉には明らかに戸惑いが混じっていた。

『全兵装だと？攻撃兵装は既に出した筈だ。デコイも防御兵装も自由。……具体的に何が要る？』

「攻撃を受けたときに電子対抗兵装を使用する。許可を」

旧式化しつつあったF-15Jイーグルは戦後に行われた3度目の大規模改修によって、その能力を限界まで高めることに成功していた。ECMと呼ばれ、直ぐに時代に追い越される存在であった電子兵装も、再び最先端の実力を取り戻していた。これならどんな中距離ミサイルだって十分に抑えられる。

『情報漏洩が懸念されるが、まあいい。攻撃を受けた場合に限るぞ』

だが、即座に許可が返ってきたのは少し予想外だった。兵器の性能が漏れてしまうだけでも軍事的な脅威となりかねないだけに、使用が許可されないことのほうが多いのだから。

「了解。……感謝する」

恐らくは彼の独断だろう。戦後になって平和憲法の呪縛が解けたとは言え、事故や戦闘が起こるたびに批判が出てくる国情は変わらない。保身に必死になっている司令部が後で混乱を招く許可を出すわけが無かった。

『気にするな。……死なれたら責任問題だからな』

「そういう事にしよう」

彼なりの心配りに感謝して、スロットルを開く。相対距離40nm(72km)、とづくに中距離ミサイルの射程だった。レーダー探知の警報音が断続的に鳴り始める。相手のレーダーの走査に掛かったらしい。だが、此処まで時間が掛かることを考えればそこまで

優秀ではなさそうだ。

「This is Japan Air-Force. (こちら日本空軍。南東方面に進行中の所属不明機へ告ぐ)」

このまま領空侵犯させたら元も子もない。何とかして変針させるか阻止する必要があった。

「You are Overflighting for our Airspace. (貴編隊の針路はわが国の領空を侵犯する可能性がある)」

編隊長のF-15Jが彼らの後背を取るまでは、何としても彼らの注意を引きつける必要がある。

「We have kill permitting based on our ROE. Change the course and exit our Air-defense identification zone immediately. (当方は交戦規定に基づき撃墜も許可されている。直ちに進路を変更せよ)」

俺がそう告げた途端に不明編隊に乱れが出た。あの戦争での日本の行動を知っている相手なら流石に怯えるものだろう。現在の交戦規定(Rule of Engage、通称ROE)が大幅に過激な方向へとシフトしているのは周知の事実だ。

但し、戸惑ったのは敵機だけではなく、味方の管制機も同じだったようだ。早速慌てた声が帰ってくる。

『おい、交戦規定の適用は許可されていないぞ』

流石に回線は暗号化された秘匿回線だったが。

「驚くなよ、はったりだ」

……実は領空侵犯をされても即座には撃てなかったりする。事前に適用の宣言がされていなければ自衛戦闘のみに当てはめられるからだ。その辺りは平和憲法の名残か。

個人的にはそれくらいあったほうが暴走を防げてよさそうだと思うが、いざ戦闘が始まりそうな場面になってしまえば邪魔でしか

ない。

「Shoot down upon seeing the overflight. Change the course and exit our Air-defense identification zone. (領空侵犯を確認した時点で撃墜する。針路を変更せよ)」

せめて脅しになればいいものだが……。

「Don't be anxious. They can't kill us until our shoot. (慌てるな、こちらが撃たなければ撃たれることはない)」

牽制すらも出来なかったか。相手側に冷静沈着な指揮官がいるのだから仕方ないが。

態々(・・)オープン回線を使うことで、編隊の統率を取り戻すだけでなく此方に対する牽制までしてみせた。此方からは撃たせはしないと、そう言うことが。

「Tell me your affiliation. (貴編隊の所属を名乗られたし)」

彼らが日本を熟知しているのは判った。おそらく長い間日本を調べ続け、それに見合うだけの対策も立ててあるのだろう。それが出来ている組織は大陸の北半分に押し込まれたかつての敵国と、一つのテロ組織だけのはずだ。前者には余力が無く、後者に至っては遙か昔に過去に葬られた存在のはずだった。今更普通の機体を駆り出して堂々とやってくる国はいないはずなのだが……。

「No need to claiming. (名乗る必要はない)」

まあ、聞いたところで無駄だったのは判っていた。相手が素直に答えるとも思えなかったし、答えて貰っても何の意味もないのは変わらない。時間稼ぎにしかないか。

「厄介だな……」

しかも時間も向こうの味方となりつつあった。時間を掛けすぎて

領空との境界線に近付き過ぎたのだ。此れ以上接近を許しては、島嶼部とは言え陸地で空戦を行う羽目になりかねない。

だが、運は多少此方に向いていたらしい。

『Warning, the enemy's locked on radar! (警告、レーダー照射を受けている!)』

唐突に鳴り出した警告音と管制官の緊迫した声が、逆転のチャンスを告げた。相手が此方のことをよく知っていたからといって、全員の練度がそれを生かせるほど高いわけではなかったのだ。

「Roger that. (了解)」

対抗措置として同じ行動を返すのは、”規則上で”許可されている。つまり、少なくとも此方には既に一定レベルの威嚇が許可されていると言うことだ。

「……仕掛けてみるか」

J/APG-2を空対空モードで固定。広域走査から集中照射に変え、最大出力で稼働させた。

『仕掛けるだど？コブラ12、何を考えている!』

「向こうを暴走させて”撃たせる”」

一瞬にして不明編隊の正確な動きがMFDに表示される。俺はその中の1機——一番動きの悪い3番機——に照準を合わせた。

「Cobra 12, Radar Lock. (コブラ12、レーダーロック)」

それぞれの電子の眼が互いの一挙一足を監視する。この緊張に耐えかねた方から軽拳に走って……墜ちるのだ。

『馬鹿な！戦争でも起こす気か!』

——管制官の怒声。ある意味当然か、だが、……そうじゃない。「いや、そうじゃない。……まだ、終わっていないかったただけだ」

日本人の殆どが忘れているだろう。俺も、今この瞬間まで忘れていた。大陸の雄武国家相手にしても、伝説のテロ組織が相手でも、“公式”には何も終わっていないのだと。

「……戦争が」

俺が呟いたのとほぼ同時に、機体の電子対抗兵装——統合電子戦装置——が起動し、連動してメインコンピュータから警告音声が響いた。

——Warning・Incoming Missile（警告、ミサイル接近）

『（所属不明編隊ミサイル発射！回避しろ！）』
所属不明編隊、いや……敵編隊の3番機が中距離ミサイルを撃ってきている。数は2本、変針すれば普通に避けられる程度の脅威でしかなかった。だが、此処で逃げ出すわけにも行かないだろう。

「ECM activated」（ECM展開）」
前面のスイッチの一つを押し込む。同時にこの機体——F-15J改三型——が持つ電子の眼が、そのもう一つの力を開放した。

——バレージジャミング

莫大な電力と引き換えに機載レーダーの限界に近い出力で相手の眼潰しを行う究極の電子兵器。ありふれた考え方ゆえに実現も難しかった電子戦の切り札がこの新しい電子の眼には搭載されていた。決して新しいとは言えない相手側の中距離空対空ミサイルは、既に此方を見失っていた。貧弱なシールドでは受信機も内蔵レーダーも守れなかったようだ。あのミサイルはもはやただのロケットに過ぎない。

「攻撃を受けた。……交戦規定を適用して構わないな？」
兎に角、これで大義名分は整った。此方からの反撃も規則に縛ら

れること無く出来る。

『……許可する』

俺の事実上の通告に対して、管制官は渋々ながら許可を下した。

『……Midnight eye to Cobra team, cleared to engage. Destroy them all. (……ミッドナイトアイよりコブラ編隊、交戦を許可する。全機撃墜せよ)』

その言葉を聞いて安心する。同じようできてあの頃とは違つ対応に。そして……。

「Copy. (了解)」

あの頃と変わらない空の匂いに。……深く息を吸い込んで一呼吸する、静かな風に血の匂いが微かに薫った。

——Cobra12, Engage. (コブラ12、交戦)

Episode 1・2 Eagle of Warfare (2) (後書き)

前回投稿時に一週間とか書いた気がしますが一月掛かりました。
遅筆による遅延を深くお詫び申し上げます。

なお、次回投稿は一月後を目処とさせて頂きます。遅くなる可能性があるので予めご承知下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7659w/>

Celestial Memories　――想いの交差する空で――

2011年11月9日03時19分発行